

# 宮城県日中友好協会

TEL・FAX 022-274-3811

E-メール jcfa-miyagi@rose.plala.or.jp

ホームページ http://www16.plala.or.jp/miyagikenn/



3月、(弥生 やよい)。弥生には草木がますます生い茂る月(弥には、ますます、生には生い茂る)という意味があります。また、桜月(さくらづき)花見月(はなみづき)などという別名があり、考えるだけでうれしくなる月でもあります。今年こそは桜の下で皆さんと一緒に楽しめることを楽しみにしています。

## 1. 2月から3月の行事

日時	行 事 名	場 所
2月20日 (日)	日中友好日本語スピーチコンテスト 14:00~ 16:00 青年委員会	Zoomでのオンラインで実施

※ 各地区協会・委員会の行事報告等あれば掲載いたしますので、ぜひFax, メール等でお知らせください

## 2. 石巻地区日中友好協会「春節祝賀会・役員会開催」について(松浦事務局長)



2月1日の中国の春節の日にコロナで多くの人の集まりは出来ませんので、せめて役員の方々に日中国交正常化50周年記念春節祝賀会を開催しようとの白井省三会長の提案で決まりました。会場も当協会理事で中国語講座を担当して頂いている韓劉倍霞様の中国料理雲雀で開催、白井省三会長・斉藤敏子副会長・新しく監事になりました高瀬智章様以下11の方々に会長の提案による新年度の行事等につき検討致しました。全員マスク着用しての会議となりました。私(松浦)も、今年83歳となり、難聴が進み補聴器両耳につけても聞こえが悪く、階段の上り下りもきつく、車の運転も夜は極力

止めてと、そして、今回から時流にのっとり連絡等はメール主体にしてと白井会長より提案があり、私はもう無理なので今回を持って事務局長を退任致しました。昼食会も黙食で雲雀さんの美味しい弁当会食と、それでも白井会長の提案により日中国交正常化50周年記念春節祝賀会として開催出来た事は最高の思い出となりました。後任の事務局は木村正幸理事長が担当して、木村裕一理事が補佐する事になり盤石な体制となりました。私も63歳頃から83歳まで皆様に助けて頂き約20年間もお世話になり感謝に耐えられません。長い間、本当にありがとうございました。県協会理事も退任となりますので宜しくお願い致します。益々のご発展を!

※永い間、宮城県日中友好協会の友好活動を支えていただいたことに感謝申し上げます。

## 3. 「寂聴と北京」展に想う 山本 均(県協会・副理事長)



昨年11月に瀬戸内寂聴さんが99歳で亡くなりました。私が岩手県・浄法寺町(現・二戸市)の町長時代、古刹・天台寺に寂聴さんを住職に招いたことから、長く深いお付き合いとなりました。

この1月、徳島県立文学書道館・瀬戸内寂聴記念室で「寂聴と北京」の展示(12月27日迄)が企画され、親しい関係者に資料を送っていただきました。改めて寂聴さんの原点が20

代前半に暮らした北京にあったことを知ることができました。日中国交正常化50周年の年にあたり、何かの参考になればと「宮城版」をお借りして一部ご紹介させていただきました。

寂聴さんは東京女子大の時代、小説家への夢は「大それた夢だ、いっそさっさと結婚して国外へ」と繰り上げ卒業し、結婚した夫ともに1943年10月に北京に渡る。夫は中国古代音楽史を研究する学者で、「見合い結婚で、北京で暮らせるということだけで、この縁談がまとまることをのぞんでいた」。当時は日中戦争のさなかであり、7回にわたる転居、一人娘の出産、夫の召集、北京で迎えた敗戦、重い病氣。北京での3年間は、少女の頃から忠君愛国で育った寂聴さんのまさに魂の方向の始まりであった。また後の人生に影響を与えた出会いでもあったように思います。

### 北京の本屋での出来事

寂聴さんが日本人の経営する北京の大きな本屋で、新刊の『人形師天狗屋久吉』（著者・宇野千代）と出会う。懐かしい作者名であり、また故郷の阿波の文楽人形造りの実話であったようだ。寂聴さんは、文字通り、息も継がず、読み通してしまったという。「読み終わった後、私は新婚生活がはじまってまだ一ヵ月も経っていないのに、しまったという思いがじわじわ心に広がってきて、居ても立ってもいられない」「子供の頃から小説家になりたかったのだった」「天狗久の小説は、一遍に私の小説への憧れと夢を眠りの中からゆさぶりおこしてきた」「(夫に)すみません、私、小説家になりたかったんです。それなのに結婚してしまって……と、呻くようにつぶやいていた」（『宇野千代さんとの半世紀』から）

寂聴さんは、ひどい肋膜炎を患う。「北京で迎えた終戦の体験が私に教えたものを、私はこの病中にようやく自分の目で見つめなおす機会を得たのかもしれない。権威や権力のはかなさ、もっとむなしい人間と人間の結びつき、愛も情熱も、戦争という巨大な暴力の前では、何の力もなくひきさかれ、ふみ砕かれてしまう」（『いずこより』から）

### 文壇デビュー作『女子大生・曲愛玲』

1946年6月、引き揚げ船を1ヵ月近く塘沽港で待ち、佐世保から徳島へ。1957年1月、『女子大生・曲愛玲』が第3回新潮社同人雑誌賞の受賞作となり、実質的な文壇でデビューとなったのである。この作品は不可解かつ魅惑的な曲愛玲と私の夫の同僚である女性教授・山村みねとの愛を描いた作品（『白い手袋の記憶』所収）であり、北京を舞台にしている。

### 中国との文化交流

1973年2月下旬から3週間、日中文化交流協会の作家の一員そして唯一の女性として寂聴さんは中国を訪問する。北京は27年ぶりだった。寒風の北京空港には中日友好協会の廖承志会長をはじめ、20代の頃に愛読していた女性雑誌「新女苑」で愛読していた女流作家・謝冰心女史もおり、手を取り握手を交わしたという。1973年4月には廖承志会長を団長に、中日友好協会代表団を迎え、謝冰心女史は瀬戸内晴美宅を訪問したのである。

また2002年8月に中国を再訪した寂聴さんは北京から車で1時間ほどの長辛店という町で、戦争時に同年配だった庸さんと馬さんという、男女二人に会う。そして日本兵の蛮行の話では「私は聞きながら恥しくて全身に汗が湧いてきた」と記し、そして新中国の現在など話し合ったことを『寂聴中国再訪』にとどめている。

あらためて日中戦争下、北京での体験が平和と愛を模索する、寂聴さんの原点になったことを感じました。引っ越すことのできない、そして文化の深いつながりのある隣国・中国との平和・友好こそ、私たちが未来につなげていく使命であると思いました。心より哀悼の意を表します。

#### 4. 「日中友好日本語スピーチコンテスト」開催について（青年委員会）

2月20日（日）14：00～ 日中国交正常化50周年、宮城県・吉林省友好都市締結35周年を記念して、Zoomオンラインで第1回となる「日中友好日本語スピーチコンテスト」が開催されました。7名の宮城県在住の中国出身者（留学生も含む）が参加し、宮城県について思ったことや魅力、出来事等について発表しました。審査には宮城県日中友好協会の金井恭子副会長（審査委員長）、江幡武相談役（審査委員）、鎌田城行青年委員会常務委員（審査委員）が当たり、各々のスピーチ後新沼光昭青年委員会委員長が日本語で簡単な質問を行いました。審査の結果、最優秀賞には「宮城県が育んだ将来の夢」と題して発表した宮城大学食産業学群動物遺伝育種学研究室4年 呂官霖（四川省出身）さんが選ばれ、聴衆賞には「宮城県での出会い」を発表した石巻専修大学 張啓媛（江蘇省出身）が選ばれました。各々には豪華な賞品が贈られました。最後に、木村吉貴青年委員会副委員長より御礼と今後の抱負の挨拶があり、聴衆した皆様からも①宮城の地で頑張っている姿に感動した。②苦勞しながらも大きな夢をもって挑戦している皆さんの声が聞けて大変素晴らしいコンテストでした。③大会が継続して開催されることを期待します等の声をいただきました（詳細は次号で）。

#### ※ 最優秀賞：『宮城で育んだ将来の夢』呂官霖（宮城大学 4年生）

宮城大学食産業学群動物遺伝育種学研究室4年生、中国四川省出身のロカンリンと申します。本日はよろしくお祈りします。

私は子供のころからクレヨンしんちゃんとドラえもんが大好きで、日本への好感を持つようになりました。高校の二年生から日本語を勉強してきました。日本社会や文化に対する理解を深めるとともに、だんだん日本のことが好きになりました。そして、高校卒業後は日本に留学することを決めました。

留學生活では、新たなことにチャレンジしているとよく感じました。母国以外の国で生活するのは人生の初めてで、何でも自力でしないといけない状況の中で、一人暮らしの辛さを学ぶことができました。1年目は日本語が全く話せなかったのが、神奈川県日本語学校で1年間日本語を勉強しました。2年目は宮城大学に進学して日本語がやっと少し話せるようになりましたが、日本語で行う授業は聞き取れなくて、日本人の友達もまだ出来なく、非常に大変でした。そして、2年目の後半から、宮城県のいろいろな国際交流イベントに参加して、日本人の友達もできるようになり、素晴らしい大学生活を送るようになりました。そのおかげで日本語能力が大幅に上達しました。その時に生活で応援してくれた宮城県の友達や学業でご指導頂いた大学の先生方のおかげで最高な大学生活を過ごすことができ、今でも感謝の念に堪えません。

宮城での大学生活を始めてからもう4年間が経ち、今年の3月には大学を卒業します。宮城県で身に付けたものや経験したこと、学んだことは私にとって非常に大切なものであり、将来の人生にも大きな影響を与えたいと思います。杜の都と呼ばれる仙台では様々なことを経験し、宮城県の方々のご支援のおかげで、何もできない私は今まで成長してきました。将来、私の力が少しでも役に立ちましたら、ご恩返しのできる気持ちで努力していきたいと思っています。

宮城県の大学を卒業した後、引き続き宮城県の大学院の畜産研究科に進学して、豚肉に

ついて研究していく予定です。将来、大学院を卒業したら、養豚研究所に就職し、中日両国の養豚産業に貢献するのが自分の目標です。経済成長とともに、普通の豚肉はだんだんに消費者を満足させることができなくなりました。消費者は値段が高くても、柔らかくて臭くない豚肉が求められることが予想されています。先行研究において、豚肉の臭い原因であるスカトールは、乳酸菌配合飼料の投与によって減らせることが科学的に検証されました。これから、乳酸菌など多種多様な機能性飼料素材をどのように活用して、高品質な豚肉を生産するか、非常に重要な課題となります。とくに宮城県畜産試験場では、家畜の肉質の改良に関する研究が多く行われてきました。それらの中で、仙台牛の改良がよく知られており、現在でも最先端な技術を使って霜降りをさらに改良しています。豚も同様に、科学的な育種改良に加えて、機能性がある飼料を投与すれば、柔らかくて臭みがない付加価値が高い豚肉を得られると考えます。将来、私は養豚の研究所に入って、自分が日本で勉強したことを生かして、豚肉の品質を向上させて、養豚技術の進化に貢献したいと思っています。

美味しい食べ物には国境がないと言われています。これから、日本の研究者とともに、豚の肉質の向上に貢献したいです。また、中国人留学生として、中国と日本、さらに世界との交流の国際橋梁になりたいです。

これから、中国人の日本に対する理解を促進し、中日両国の友好を促進するために役割を果たしていきたいと思っています。自分は、将来、中日両国の『山川域を異にすれども、風月天を同じうす』の友好を見届ける証人になると信じています。以上です。ご清聴ありがとうございました

## 5. 宮城県日中友好協会の今後の予定

1. 4月9日（土）理事会 13：30～ 宮城県民会館（コロナの状況次第で中止も？）